

学生と社会人の エイズに対する知識, 態度及びリスク行動

高橋 丈司
Takeshi TAKAHASHI
(心理学教室)

伊藤 求
Motome ITO
(愛知県安城保健所)

佐藤 猛男
Takeo SATO
(愛知県豊明保健所)

I. 問題と目的

第10回国際エイズ会議は, 1994年8月7日から8月12日まで, 日本の横浜で開かれた。会議は, A:基礎研究 (Basic Science), B:臨床・治療 (Clinical Science and Care), C:疫学・予防 (Epidemiology and Prevention), D:社会・教育 (Impact, Societal Response and Education)の4つの分野に大きく分かれて, 多くの研究発表が行なわれた。しかし, いくつかの新しい知見はあったが, まだ, エイズの根治薬も予防ワクチンも開発されたとは報告されていない (Tenth International Conference on AIDS Abstract Book Vol 1, 2, 1994)。

このような状況では, 個人が感染の恐れのある行動を回避することが最良の防衛措置である (広瀬, 1989)。エイズ予防教育及びそのほかの啓発活動が緊急に必要とされる。

1994年6月30日のWHOの報告によれば, アメリカ合衆国 (以下アメリカと記す) のエイズ患者数は, 411,907人である。アメリカは, 1981年にエイズ患者が確認されて以来, 爆発的にエイズ発症者が増え続けている。この原因・理由は, いろいろ考えられるが, 少くとも次の2つの理由は, 日本にとっても大いに参考になり, 考えさせられる。

ひとつは, アメリカの政府及び国民が, 1980年代前半は, 自分たちの病気と考えずに, 一部の特殊な人達, 即ち, 男性同性愛者や静脈注射による麻薬常用者の病気と認識し, また, 感染者・患者たちを職場や病院が差別する傾向にあった。

現在, 日本では, 人々は, 身近な, 自分の問題として, エイズを考えているだろうか。

もうひとつは, アメリカの中学・高校でのエイズ・性教育は, 多民族, 多宗教, 多言語社会の難しさから, 遅々として進まぬ状態が続いてきた (宮本巖ら編, 1993)。

日本のエイズ予防教育はどの位行なわれているのだろうか。日本は, 多民族, 多言語で

はないけれども、エイズ予防教育は、アメリカと同じように、あまり行なわれていないのではないだろうか。

1994年6月30日の厚生省エイズサーベイランス委員会の報告によれば、日本のエイズ患者数は、764人（血液凝固因子製剤（以下血液製剤と記す）による患者450人を含む）である。また、HIV感染者数は、3,389人（血液製剤による感染者1,772人を含む）である。感染源の第一は、血液製剤で、これによる者は全感染者の58%を占める。次が、異性間の性的接触であり、749人、22%である。3番目が同性間の性的接触で、336人、10%である。静脈注射による薬物濫用及び母子感染は、それぞれ1%未満である。なお、不明及びその他が15%ある。

感染源の第一である血液製剤は、1985年、汚れた輸入血液製剤を使用することを止め、加熱処理された血液製剤を日本も使うようになったので、現在は、予防を考える時、HIV感染源として考えなくてよいであろう。

従って、現在の日本におけるHIV感染源の第一は、異性間性的接触である。

アメリカのJ.A. Kellyらは、1993年、American Psychologist誌に、「HIV感染を予防するために心理学的介入が緊急に必要とされている」という論文を発表した。その冒頭、「行動変容だけが、HIV病の基本的予防の唯一の手段である。心理学はこの病気の蔓延を抑えるために、主要な役割を果すべきである」と述べている。

本研究は、HIV感染の広がり予防策を考えるために、学生と社会人を対象として、エイズに関する知識と態度、HIV感染の恐れのある行動、及びエイズ教育を調査することを目的とする。

なお、本報告は、第10回国際エイズ会議のD：社会・教育の分野で、発表した内容を日本文に直し、加筆したものである（Takahashi, T. & Ito, M., 1994）。

II. 方 法

1. 調査票

調査票は、次のような内容からなる。教示、フェイスシート（年齢、性別、職業、配偶者の有無）、①エイズに対する態度（意識）、②エイズ予防教育、③エイズに関する知識、④HIV感染の恐れのある行動、⑤HIV感染不安と血液検査、⑥HIV感染に対する意識、⑦コンドームに対する態度、⑧保健所に対する要望事項。

①のエイズに対する態度は、広瀬（1990）の補章「リスクはどう捉えられるか」を参考にし、③～⑦は宗像（1991）を主として参考に作成した。

なお、本論文では①から④までを報告する。

2. 調査期間

1993年5月から1993年11月

3. 調査方法

学生については、授業（エイズ以外の講義）の終了時に、プライバシーに配慮して別紙の調査用紙（付票）を封筒に入れて配布し、回答後、封筒に入れて貰い回収した。

社会人については、学生に対してと同じように、あらかじめ封筒に入れた調査用紙を、保健所の講習会の開始前に配布し、受講前に記入して貰った。そして、講習会終了後、会場出口で回収箱に封筒に入れた状態で投入して貰った。

表0-1 対象者の年齢

	総 数	19歳以下	20～29	30～39	40～49	50～59	60歳以上
人 数	924	191	355	101	165	98	14
割 合 (%)	100.0	20.7	38.4	10.9	17.9	10.6	1.5

表0-2 対象者の性別

	総 数	男	女
人 数	924	315	609
割 合 (%)	100.0	34.1	65.9

表0-3 配偶者の有無

	総 数	有	無	無記入
人 数	924	353	564	7
割 合 (%)	100.0	38.2	61.0	0.8

表0-4 対象者の職業

	総 数	学生 512 (55.4%)			社会人 412 (44.6%)			
		四大生	短大生	専門学校生	理・美容師	食品業者	給食従事者	会社員
人 数	924	227	116	171	67	279	53	11
割 合 (%)	100.0	24.6	12.6	18.4	7.2	30.2	5.7	1.2

なお、本調査は、プライバシーに関する調査項目があるため、支障があれば「無記入」でも差し支えない旨を調査票のはじめのところに記し、実施の際、口答でも説明した。

4. 調査対象

調査対象は、学生と社会人である。本調査の目的から、性別、年齢、エイズに対する態度、及び予防教育のいずれかについて無記入の回答は、今回の分析から除外した。調査用紙提出人数1,166人、有効回答人数924人、有効回答率79.2%。調査対象の年齢別、性別、配偶者の有無及び職業別の内訳は、表0-1、表0-2、表0-3、表0-4の通りである。なお、対象者の属性のクロス集計は、表0-5、表0-6の通りである。

5. 集計及び分析

計算は、名古屋大学大型計算機により行い、プログラムは SAS を使用した。検定は、F検定、 χ^2 検定によった。

III. 結果及び考察

1. エイズに対する態度（意識）

ここでは、エイズに対する関心（質問1）からエイズにかかる危険性の回避（質問6）までを報告する。エイズに対する態度は、HIV 感染の恐れのある性行動をとるかとならないかに影響すると考え、調査した。即ち、どの位エイズに関心があるのか、どの位リスクを

表0-5 年齢×性・配偶者・職業

	人数	19歳以下	20～29歳	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上
全 体	924人 100.0%	191人 20.7%	355人 38.4%	101人 10.9%	165人 17.9%	98人 10.6%	14人 1.5%
[性]							
男 性	315	4.4	30.5	19.7	27.6	14.3	3.5
女 性	609	29.1	42.5	6.4	12.8	8.7	0.5
[配偶者]							
有	353	0.3	4.3	22.7	43.1	26.4	3.4
無	564	33.7	60.3	3.7	1.4	0.5	0.4
無記入	7	0.0	0.0	0.0	71.4	28.6	0.0
[職業]							
学 生	512	36.9	62.7	0.4	0.0	0.0	0.0
社 会 人	412	0.5	8.3	24.0	40.1	23.8	3.4
[学 生]							
四 大 学 生	227	6.6	93.0	0.4	0.0	0.0	0.0
短 大 学 生	116	74.1	25.9	0.0	0.0	0.0	0.0
A 専 門 学 校 生	93	96.8	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0
B 専 門 学 校 生	78	0.0	98.7	1.3	0.0	0.0	0.0
[社 会 人]							
食 品 業 者	279	0.0	10.0	26.5	41.9	17.9	3.6
給 食 従 事 者	53	0.0	0.0	15.1	35.9	49.1	0.0
理・美 容 師	67	0.0	3.0	16.4	41.8	32.3	6.0
会 社 員	11	0.0	36.4	54.6	9.1	0.0	0.0

認知しているのか、それらは、リスク行動に影響するだろう。

各質問とも、選択肢を極めて否定的な項目〔例 質問1では(1)全く無関心である〕から極めて肯定的な項目〔例 質問1では(6)非常に興味がある〕まで6つを用意し、心理的にはほぼ等間隔にこれらの項目を提示したので、結果は、項目番号をそのまま数値化して処理した。

結果は、全体の傾向とデモグラフィックな変数（年齢、性別、職業別等）で有意差がある場合、それを述べることとする。

ア エイズに対する関心度は、表1-1が示すように、「少し関心がある」が、全体(924名)の平均である (M (平均)=4.19)。まだ身近な問題としてエイズを認識していないが、関心はあるというところである。年齢別にみると、図1-1が示すように、差があり、V字形をしている(60歳以上は除く)。即ち、10代(18歳と19歳である、今回の調査は大学生、短大生、専門学校生を対象としているが、高校生は含んでいない)、20代、30代の比較では、10代が一番エイズに関心があり、20代、30代の順になっている。そして、40代、50代でまた関心が高くなっている。18、19歳が20代や30代に比べて、関心が高いのは、性的に活発なまたは、近い将来活発になる時期であるからであろう。50歳代が、30代、40代に比して高いのは、自分の問題としてだけでなく、20歳前後の息子や娘を持つ年齢であるからであろう。30歳代が他の年齢より低いのはなぜだろうか。仕事に忙しく、またそのために、エイ

表0-6 性×配偶者・職業

	該当者数	男 性	女 性
総 数	924人 100.0%	315人 34.1%	609人 65.9%
[配偶者]			
有	353	54.1	45.9
無	564	21.5	78.6
無記入	7	42.9	57.1
[職業]			
学 生	512	15.8	84.2
社 会 人	412	56.8	43.2
[学 生]			
四 大 学 生	227	28.2	71.8
短 大 学 生	116	0.0	100.0
A 専 門 学 校 生	93	12.9	87.1
B 専 門 学 校 生	78	7.7	92.3
[社 会 人]			
食 品 業 者	279	60.9	39.1
給 食 従 事 者	53	7.6	92.5
理・美 容 師	67	74.6	25.4
会 社 員	11	72.7	27.3

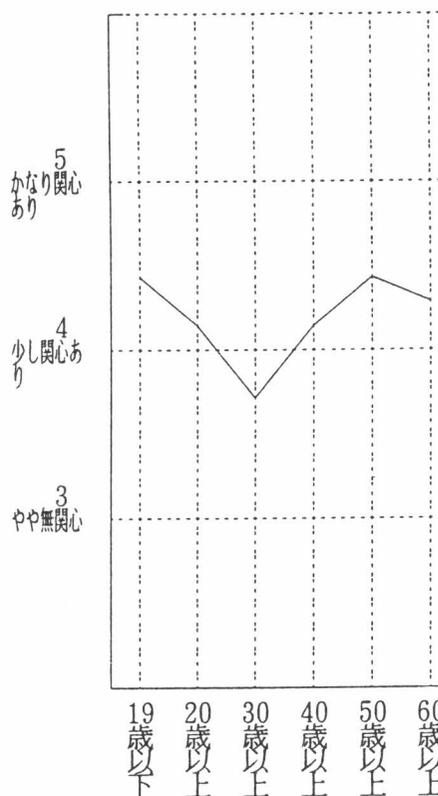


図1-1 エイズに関する関心度

ズ予防教育を受けている者の割合が、他の年齢群(例、19歳以下64%)よりも低いこと(13%)が起因していると思われる。

職業別でみると、短大生は関心が高く、会社員は関心が低い。これは、短大生は若いこととエイズの予防教育を受けた者が60%近くいるのに対し、会社員は今回は調査対象が11名で少ないが、20代と30代の者で、エイズの予防教育を受けた者は0であることと関連していると思われる。

イ エイズについての不安度(質問2)は、「あまり不安を感じない」が全体の平均(M=3.22)である。年齢別にみると、19歳以下が一番不安があり、30代、40代が低く、50代でまた少し高くなっている。これは関心度の場合と同じ理由と思われる。職業別でみると、会社員は他の職業の人よりも不安を感じていない。一方、B専門学校の学生は、不安を、他の職業の人よりも、感じている。これは、エイズ予防教育を受けていること(75%)と、特定のパートナー以外の人とこの3年間にセックスをしたことがあると報告した者が多いこと(42%)と関連していると思われる。

ウ 「エイズによって、あなたはどの程度被害を受けると感じますか」(質問3)に対して、「あまり被害を受けない」と回答している(M=3.09)。年齢別にみると、右下がりの傾向にある。自分へのエイズ被害の認知は、あまり被害を受けないと言っているものの、

表1-1 エイズ意識（リスク認知）

	人数	関 心 度		不 安 度		被 害 度		防 止 可 能 性		国による対策の可能性		危 険 の 回 避	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
全 体	924人	4.19	1.09	3.22	1.21	3.07	1.50	4.62	1.19	4.08	1.24	4.83	0.97
[年齢]													
19 歳 以 下	191	4.32	1.09	3.38	1.15	3.28	1.53	4.72	0.95	4.03	1.14	4.79	0.90
20 ～ 29 歳	335	4.18	1.00	3.31	1.05	3.25	1.39	4.78	0.94	4.14	1.11	5.03	0.72
30 ～ 39 歳	101	3.83	1.20	3.03	1.23	2.79	1.47	4.40	1.30	3.88	1.37	4.62	1.05
40 ～ 49 歳	165	4.13	1.09	2.97	1.32	2.92	1.60	4.58	1.36	4.15	1.35	4.67	1.20
50 ～ 59 歳	98	4.42	1.17	3.23	1.47	2.86	1.53	4.16	1.67	3.99	1.52	4.61	1.27
60 歳 以 上	14	4.29	1.07	2.86	1.70	2.14	1.56	4.57	1.70	4.64	1.01	5.07	0.83
有 意 差			***		***		—		***	
[性]													
男 性	315	4.13	1.12	3.26	1.21	3.25	1.57	4.53	1.23	3.98	1.31	4.76	1.06
女 性	609	4.22	1.07	3.20	1.20	3.01	1.46	4.67	1.16	4.13	1.20	4.86	0.92
有 意 差		—		—		*		—		—		—	
[職業]													
学 生	512	4.24	1.06	3.32	1.09	3.25	1.44	4.78	0.91	4.13	1.09	4.97	0.75
社 会 人	412	4.13	1.13	3.09	1.33	2.90	1.55	4.43	1.44	4.02	1.40	4.65	1.17
有 意 差		—		..		***		***		—		***	
[配偶者]													
あ り	353	4.17	1.14	3.06	1.35	2.88	1.58	4.44	1.43	4.05	1.38	4.69	1.14
な し	564	4.21	1.05	3.31	1.09	3.21	1.44	4.73	1.00	4.10	1.14	4.92	0.84
無 回 答	7	4.14	1.21	4.00	1.15	4.00	1.14	5.00	0.82	4.43	1.51	4.14	1.07
有 意 差		—		..		***		***		—		***	
[学生]													
四 大 学 生	227	4.00	0.89	3.13	1.07	3.30	1.37	4.76	0.95	4.14	1.03	5.08	0.64
短 大 学 生	116	4.77	1.11	3.33	1.09	3.05	1.38	4.95	0.76	4.30	1.04	4.94	0.74
A 専 門 学 校 生	93	4.03	1.08	3.46	1.17	3.44	1.65	4.55	1.02	3.75	1.20	4.68	0.97
B 専 門 学 校 生	78	4.42	0.96	3.67	0.93	3.21	1.44	4.82	0.80	4.26	1.08	5.01	0.65
[社会人]													
食 品 業 者	279	4.05	1.12	3.02	1.30	2.89	1.55	4.44	1.43	4.00	1.42	4.56	1.21
食 品 関 係 者	53	4.22	1.13	2.98	1.36	2.54	1.35	4.30	1.64	3.90	1.55	4.92	0.97
理 ・ 美 容 師	67	4.45	1.16	3.45	1.41	2.99	1.59	4.46	1.29	4.24	1.14	4.75	1.08
会 社 員	11	3.63	0.80	2.81	0.98	3.36	1.74	4.27	1.27	3.63	1.36	4.54	1.21
有 意 差		***		***		**		***		*		***	

F検定 *** P<0.001 ** P<0.01 * P<0.05

10代、20代が一番高く、だんだん年齢が高くなるに従って、下がっていく。60歳以上では、「ほとんど被害を受けない」(M=2.14)と認知している。これは、性行動の活発さと関連があるようである。職業別にみたとき、A専門学校と学校給食員との間に一番差があるが、これは、年齢差の反映と思われる。A専門学校生は、19歳以下が97%であり、学校給食員は、85%の者が40代及び50代である。

エ それでは、「エイズ被害の防止の可能性」(質問4)は、どのように認知しているのだろうか。「かなり又は少し可能である」(M=4.62)と認知している。年齢別にみると、若い方(10代及び20代)は被害の防止をかなり可能であると信じており、50歳代は少し可

能であると思っている。職業別にみると、学生の方が、社会人よりも、自分がエイズ被害を防止できると認知している。

オ 「国や公共機関は、エイズに対して有効な対策を行うことがどの程度可能であると思いますか」(質問5)に対して、「少し可能である」(M=4.08)と少しの信頼を表明している。職業別では、短大生と会社員との間に差があり、短大生の方が国や公共機関のエイズに対する有効な対策を信頼している。

カ それでは、個人レベルの努力で、エイズにかかる危険はどの程度避けられると思っているのであろうか(質問6)。「かなり可能である」(M=4.83)と思っている。年齢別にみると、20代は危険の回避の可能性を50代より高く考えている。また、職業別でみると、学生の方が社会人よりもエイズにかかる危険を回避できると認知している。同じ若者でも、四大生とA専門学校生では、四大生の方が、危険の回避の可能性を高く認知している。

2. エイズ予防教育

エイズ予防教育は、受講者に対し、エイズに関する正しい知識を与え、エイズに対する健全な態度の形成、及び HIV 感染のリスク行動の回避に寄与すると考えられる。

エイズ予防教育を受けている者(質問7)は、表2-1が示すように、全サンプルの36%である。職業別にみると(表2-2)、学生では、看護学生であるB専門学校生が一番多く、75.6%の者が教育を受けており、ついでA専門学校生68%、短大生59%の順であり、四大生は26%と少ない。社会人は、美・理容師が74.6%と多いが、あとの職種は10%以下であり、エイズ教育がほとんど行なわれていない。年齢別、性別の差は、この職業別の差を反映している。例えば、19歳以下では、教育を受けている者が多いのは、19歳以下は短大生及びA専門学校生が圧倒的に多いからである(表0-6)。

3. エイズについての知識

HIV 感染ルートについての知識(質問10)は、表3-1が示すように、異性間性行为、男性間性行为、注射器のまわし打ちに対しては、全回答者の90%の者が感染ルートとして知っており、母親から赤ちゃんへは80%の者が知っている。

以上4項目全部が正解の者は68%(632人)である(表3-2)。職業別にみると、学生は、どの学校の学生も、70%を越えているのに対し、社会人は60%以下である。予防教育を受けた者が一人もない会社員は45.5%しか正解者がいなかった。

エイズ予防教育との関連を、全体でみると、教育を受けた者は、4項目正解者が75%あるのに対し、教育を受けなかった者は65%であり、差がみられる(表3-2)。

一方、国内での輸血・献血を感染源としてあげる者は、全回答者の半分を越える(51%)。わが国の HIV 感染者の多く(1772名)は、国と医者を通じて、血液製剤を使用した血友病患者だということを考える時、これは間違った知識だと断定することは出来ないであろう。逆に厚生省や医者は国民の信頼を回復すべく努力する必要がある。

4. HIV 感染の恐れのある性行動

ここでは、パートナー以外の人とのセックス経験(質問11)から性行動に最近変化がない理由(質問19)までを報告する。結果は、全体の傾向と、デモグラフィックな変数やその他の変数(例、エイズ意識・エイズ予防教育)との関連を、必要に応じて、みていく。

ア HIV 感染のリスク行動である、配偶者または特定のパートナー以外の人と、この3年間に、セックスをしたことがあると報告した者は(質問11)、全回答者(924名)の25%

表2-1 エイズ予防教育の有無（年齢・性・職業）

	人数	%	あ	る	な	い
総 数	924人	100.0%	331人	35.8%	593人	64.2%
[年 齢]						
19 歳 以 下	191		63.9		36.1	
20 ～ 29 歳	355		36.3		63.7	
30 ～ 39 歳	101		12.9		87.1	
40 ～ 49 歳	165		23.0		77.0	
50 ～ 59 歳	98		25.5		74.5	
60 歳 以 上	14		28.6		71.4	
[性]						
男 性	315		26.3		73.7	
女 性	609		40.7		59.3	
[職 業]						
学 生	512		48.0		52.0	
社 会 人	412		20.6		79.4	

表2-2 エイズ予防教育の有無（職業詳細別）

	人数	%	あ	る	な	い
[学 生]						
四 大 生	227人		25.6%		74.4%	
短 大 生	116		58.6		41.4	
A 専 門 学 校 生	93		67.7		32.3	
B 専 門 学 校 生	78		75.6		24.7	
[社 会 人]						
食 品 業 者	279		10.4		89.6	
給 食 従 事 者	53		7.6		92.4	
理 ・ 美 容 師	67		74.6		25.4	
会 社 員	11		0.0		100.0	

表3-1 HIV の感染経路の知識（複数回答）

	人数	%	食器を共用	蚊に刺され	男性同性愛	異性間行為	くしゃみ等	理・美容所	プール等	輸血・献血	注射器回し	トイレ便器	電車吊り革	握手	本等日用品	母親から
人数	924		5	37	836	856	33	107	7	471	849	8	0	0	17	740
%		0.5	4.0	90.5	92.6	3.6	11.6	0.8	51.0	91.9	0.9	0.0	0.0	0.0	1.8	80.1

表3-2 HIV 感染経路 4 項目正解（職業別・教育別）

	人数	4 項目正解	その他
全 体	924人 100.0%	632人 68.4%	292人 31.6%
[学 生] * * *			
四 大 生	227	79.3	20.7
短 大 生	116	82.8	17.2
A 専 門 学 校 生	93	72.0	28.0
B 専 門 学 校 生	78	82.1	17.9
[社 会 人]			
食 品 業 者	279	57.0	43.0
給 食 従 事 者	53	54.7	45.3
理 ・ 美 容 師	67	47.8	52.2
会 社 員	11	45.5	54.5
エイズ教育 * *			
あ り	331	74.6	25.4
な し	593	64.9	35.1

χ^2 検定 * * * P<0.001 * * P<0.01

(233名)である(表4-1)。年齢別にみると、60歳以上は、特定のパートナー以外の人とのセックスを報告した者は7%に過ぎないが、その他の年齢群においては、23%から29%であり、それほど差はない。差があるのは、職業別で、リスク行動を取っている者が多いのは、B専門学校生42%、A専門学校生34%であり、逆に、少ないのは、短大生14%、四大生17%である。今述べた4群は、20歳前後の若者達であり、学生であるが、A、B専門学校生は、四大生、短大生に比べると、高校及び高校卒業後の学校において、学業に対する意欲は低く、学業成績もよくないと考えられる。学業成績及び勉強意欲が低いことは、HIV感染のリスクのある性行動を取り易いというアメリカの研究(Brooks-Gunn, Boyer & Hein, 1988)がある。日本において、我々は、この点をもっと研究すべきである。

男女別にみると、男性36%、女性20%であり、男性の方がリスク行動を取っている。これは、日本やアメリカで男性にエイズ患者が多いことの原因のひとつであろう。特に日本ではこれからは異性交渉が HIV 感染の主な原因になると考えられる。

特定のパートナー以外の人とのセックスの経験のある者とない者との間に、関心度、不安度等エイズに対する意識に差があるかどうか、及び HIV 感染ルートについての知識に差があるかみたが、両者の間に差異はみられなかった(表4-3)。

エイズ予防教育を受けたことのある者は、HIV 感染のリスク行動を回避する傾向があるかどうかを、エイズ予防教育を受けたことのない者との比較から、吟味すると、両者の間に差はみられず、エイズ予防教育とリスク行動(ここでは不特定の人との性行動)回避との関連はなかった。これは、エイズ予防教育が効果がないというのではない。これは、エイズ予防教育の内容と回数を検討する一方、リスク行動の生起に影響するさまざまな要因の研究も必要であることを知らせてくれていると思われる(表4-4)。

イ 配偶者または特定のパートナー以外の人とセックスをした者は、前項で述べたように233名いたが、その時、コンドームを使用したかどうかは(質問12)、表4-5が示すように、「いつも使用した」者は、そのうちの38%(89名)に過ぎない。残りは、HIV 感染のリスクがある、「コンドームを時々使用した」者31%(73名)、「コンドームを全く使用しなかった」者30%(70名)である。後者2つの計143名は、ハイリスク群であるが、今回の全サンプルの15%である。

年齢別にみると、表4-5が示すように、「いつも使用した」は若い方に多く、20代52%、19歳以下42%、であり、逆に、「全く使用しなかった」は50代56%、30代49%、である。青年及び若い大人たちは、妊娠及び性病のリスクを30歳以上の大人よりも認知していると言えよう。エイズ予防教育において、不特定のパートナーとのセックスは避けるように自覚させることが第一であるが、第二には、不特定の人を相手にするなら、コンドームを使うように、若者に対しては勿論だが、30歳以上の者には懇切丁寧に指導することが必要と思われる。

また、18歳、19歳は「時々使用した」が他の年齢群より多い。リスクを認知していながら、時々行動が伴わないことを示している。10代は HIV 感染の確率が高いこと、及び、性経験後しばらくはコンドームをなかなか使用しない傾向があることなど、Brooks-Gunnら(1988)の研究は述べている。10代の若者にもっと情報を提供し、自覚を促すことが必要と思われる。

さらに職業別(学校別)にみると(表4-6)、同じ20歳前後の若者でありながら、コンドー

表4-1 特定のパートナー以外の者との性行為
(年齢・性)

		ある	ない	無 答
全 体	924人 100.0%	233人 25.2%	671人 72.6%	20人 2.2%
[年齢]				
19歳以下	191	23.0	74.4	2.6
20～29歳	355	26.5	70.7	2.8
30～39歳	101	29.7	67.3	3.0
40～49歳	165	23.6	75.2	1.2
50～59歳	98	25.5	74.5	0.0
60歳以上	14	7.1	92.9	0.0
[性]				
男 性	315	35.9	61.9	2.2
女 性	609	19.7	78.2	2.1

表4-2 特定のパートナー以外との性行為
(職業別)

	人数	ある	ない	無 答
全 体	924人	233人 25.2%	671人 75.6%	20人 2.2%
四 大 生	227	17.2	81.9	0.9
短 大 生	116	13.8	80.2	6.0
A専門学校生	93	34.5	65.5	0.0
B専門学校生	78	42.3	51.3	6.4
食 品 業 者	279	31.2	67.4	1.4
給 食 従 事 者	53	20.8	79.2	0.0
理・美容師	67	17.9	79.1	3.0
会 社 員	11	27.3	72.7	0.0

表4-3 特定のパートナー以外との性行為の有無とエイズ意識

不特定者との性行為	人数	関 心 度		不 安 度		被 害 度		防 止 可 能 性		国 の 対 策 の 可 能 性		危 険 の 回 避	
	904人	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
あ る	233	4.21	1.14	3.31	1.13	3.18	1.50	4.48	1.25	3.98	1.38	4.72	1.10
な し	671	4.18	1.07	3.19	1.23	3.03	1.49	4.66	1.17	4.13	1.18	4.87	0.92

F検定有意差なし

表4-4 エイズ予防教育の有無と特定のパートナー以外との性行為 単位：％

エイズ予防教育	人数	性行為あり	性行為なし	無記入
あ り	331人	27.2	71.0	1.8
な し	593	24.1	73.5	2.4

χ^2 検定 有意差なし

表4-5 特定のパートナー以外との性行為の際のコンドームの使用 単位：％ (年齢別)

年 齢	人数	いつも使用	時々使用	全く使用せず	覚えがない
全 体	233人	89 (38.2)	73 (31.3)	70 (30.1)	1 (0.4)
19歳以下	45	42.2	40.0	17.8	3.6
20～29歳	92	52.2	29.3	18.8	
30～39歳	31	25.8	25.8	48.9	
40～49歳	39	28.2	30.8	38.5	
50～59歳	25	12.0	32.0	56.0	
60歳以上	1			100.0	

表4-6 特定のパートナー以外との性行為の際のコンドームの使用 (職業別) 単位：％

職 業	人数	いつも使用	時々使用	全く使用せず	覚えがない
全 体	233人	38.2%	31.3	30.0	0.4
四 大 生	39	69.2	30.8	0.0	25.0
短 大 生	16	43.8	56.3	0.0	
A専門学校生	33	36.4	39.4	24.2	
B専門学校生	32	37.5	28.1	34.4	
食 品 業 者	85	35.3	27.1	37.6	
給 食 従 事 者	12	0.0	0.0	100.0	
理・美容師	12	9.1	63.6	27.3	
会 社 員	4	0.0	0.0	75.0	

ムの使用の有無に違いがみられる。四大生は「いつも使用した」が69%で、比較的高い使用率であるのに対し、A、B専門学校生は36%に過ぎない。逆に「全く使用しなかった」は、四大生、短大生は0%であるのに対し、B専門学校生は33%もいる。これは、先に、特定のパートナー以外の人とのセックスのところで述べた、四大生、短大生とA、B専門学校生との違いの考察と同じことが言えるだろう。

特定のパートナー以外の人と性行為をした時のコンドームの使用の有無とエイズ意識との関連を検討したところ、関心度、不安度等についてコンドームをいつも使用した群、時々使用した群、全く使用しなかった群の間に有意差はみられなかった(表略)。エイズリスク教育の必要性を痛感する結果であった。

また、コンドームの使用とエイズ予防教育との間に関連があるかを検討したところ、「コンドームをいつも使用した」群は、「コンドームを全く使用しなかった」群よりも、エイズ予防教育を受けている者が多い方向にあるが、有意差をみるまでには至らなかった(表略)。

配偶者または特定のパートナー以外の人とのセックスの時、コンドームを使用しなかった者は143名いたが、その主な理由は(質問13、複数回答)、「妊娠の心配がなかった」「特別気にしなかった」「持参していなかった」「性病の心配がなかった」である(表4-7)。HIV感染のリスクを認知していないと思われる。

ウ 海外でのリスク行動による HIV 感染が問題となっている。エイズサーベイランス委員会の1994年1月27日発表の資料によると、「後天性免疫不全症候群の予防に関する法施行後(1989年(平成元年)2月17日以降)、日本人男性の異性間性的接触による患者・感染者の感染地域別報告数は、国内96、海外86、不明10、合計194であり、海外での異性間の感染者は43.3%を占める。そこで、この10年間に海外に施行・出張した者がどの位いるかを調べた(質問14、表略)。全回答者の27%(250人)が海外に行ったことがあると報告している。その目的は、観光が圧倒的に多く、ビジネスや留学は少ない。海外旅行経験者を年齢的にみると30歳代が多く、性別では男性が多い。

海外には、エイズ患者が多発している国があるので、旅行者の渡航先はどこかを調べた(質問15、複数回答、表略)。多い順に5つあげると、東南アジア、ハワイ、グアム、北米、ヨーロッパである。

渡航先で、HIV感染のリスクのある行為をした者は、どの位いるだろうか(質問16、複数回答)。前述したように、この10年間に海外に旅行・出張した者は250名いるが、表4-8が示すように渡航先での HIV 感染の危険性のある行為をした者は20名で、海外旅行の経験者の8%である。HIV 感染の危険性のある行為は、すべて配偶者又は特定のパートナー以外の者との性行為である。男性同性愛、麻薬・覚醒剤の注射器による回し打ち、輸血を伴う治療は0であった。性別、職業別の内訳は表4-9の通りである。

エ 「エイズ感染者が急増していますが、このことで実際に自分の性行動に最近変化がありますか」(質問17)に対し、「ある」と回答した者は96名で、全体の約10%である(表略)。

「それはどのような変化ですか」(質問18 複数回答)に対し、「特定のパートナーとする」「コンドームを使用する」「不特定の相手とのセックスをやめた」が主な回答である。

「自分の性行動に最近変化はない」と回答した者は788名で、全体の85%である。その理由は、全体では、多い順に3つあげると「特定のパートナーとするから」「セックスをしな

表4-7 コンドームを使用しなかった理由

理 由	人 数	%
妊娠の心配がなかった	56	39.7
特別気にしなかった	55	38.5
持参していなかった	42	29.4
性病の心配がなかった	38	26.6
楽しみが減る・不快である	31	21.7
面倒・煩わしい	23	16.1
相手から要求されなかった	14	9.8
相手に要求することが恥ずかしい	5	3.5
相手の同意が得られない	5	3.5
そ の 他	1	0.7

表4-8 海外でのリスク行動

リ ス ク 行 動	人 数
特定のパートナー以外との性行為	20 (8.0)
男性同性愛行為	0
輸血を伴う治療	0
麻薬等の注射器の回し打ち	0
上記の行動なし	196 (78.4)
無答	34 (13.6)

() 内%

表4-9 海外での特定のパートナー以外との性行為
(性別、職業別)

全 体	20人
[性 別]	
男 性	18
女 性	2
[職業別]	
学 生	1
社 会 人	19

いから」「コンドームを常に使用しているから」である。しかし、四大生、短大生及びA専門学校生に限って言えば、一番の理由は「セックスをしないから」である(表4-10)。

最近の性行動の変化とエイズ意識の関連を検討したところ、不安度と被害度において差がみられた。即ち、性行動に変化があったと報告している者は、ないと報告している者よりもエイズに対する不安が高く、エイズ被害を意識している。エイズに対し不安を感じ、被害を意識した時、性行動に変化が生ずると考えられる。エイズリスク教育の必要性を感じさせる結果である(表4-11)。

IV. 討 論

回答者の性行動(不特定の人との性行為の経験有対無し、コンドームの使用対非使用)はエイズについての知識や態度と関連がなかった。事実、サンプルは全体としてエイズリスクをあまり認知していない。このことは、今回のサンプルの年齢範囲の下限である18歳よりも、前のところでの、エイズ予防教育の必要性を強く示唆している。また、社会人に対してもエイズ予防教育を推進していく必要がある。

V. 要約と今後の方向

HIV感染の広がりを防ぐ方策を考えるために、学生と社会人を対象として調査が行なわれた。調査の内容は、エイズについての知識と態度、エイズ教育、及びHIV感染の恐れのある性行動である。

調査対象は、大都市郊外の学生及び社会人924名(内訳 男315名、女609名、年齢の範囲は18歳から60歳代)で、質問紙法によった。回答は、保健所の講習会及び大学の授業の際に得た。調査時期は1993年5月から11月である。結果は、全体の傾向及び被験者の年齢、性、職業、性行動のカテゴリーによって比較された。差の検定は、分散分析及びカイ自乗検定によった。

主な結果は次の通りである。

表4-10 自分の性行動に変化がない理由

単位：％

職 業	人数	セックスなし	特定者とする	コンドーム使用	運が悪い	気にせず	その他
全 体	924	29.2	43.3	17.3	1.7	6.1	1.9
四 大 生	227	49.8	31.3	22.5	0.9	6.6	2.2
短 大 生	116	61.2	21.6	14.7	2.6	4.3	2.6
A 専 門 学 生	93	40.9	25.8	15.1	3.2	15.1	5.4
B 専 門 学 生	78	14.1	37.1	23.1	1.3	6.4	2.6
食 品 業 者	279	8.6	60.6	13.3	1.8	3.2	0.7
給食従事者	53	13.2	67.9	11.3	0.0	5.7	0.0
理・美容師	67	7.5	59.7	23.9	1.5	7.5	0.0
会 社 員	11	9.1	54.5	9.1	9.1	0.0	18.2

表4-11 最近の性行動の変化とエイズ意識

性行動の変化	人数 924人	関 心 度		不 安 度		被 害 度		防止可能性		国の対策の可能性		危険の回避	
		M	SD										
あ る な し	96 788	4.22 4.16	1.08 1.08	3.71 3.16	0.95 1.21	3.63 3.03	1.48 1.49	4.55 4.63	1.17 1.19	3.88 4.10	1.36 1.22	4.74 4.84	1.06 0.95
有 意 差		—		***		**		—		—		—	

F検定 *** P<0.001 ** P<0.01

1. エイズに対する態度(意識)は、回答者の平均は、エイズに対して少し関心があり、あまり不安を感じず、また、あまり被害も受けないと思っている。エイズ被害の防止はかなりまたは少し可能であると認知し、国や公共機関がエイズに対して有効な対策を行うことは少し可能であると思っている。そして、エイズにかかる危険性は、個人レベルの努力でかなり避けられると認知している。全体として、サンプルはエイズリスクをあまり認知していない。

2. エイズ予防教育を受けている者は、全回答者の36%である。職業別にみると、社会人は、美・理容師は75%と多いが、あとの職種は10%以下であり、エイズ教育がほとんど行われていない。

3. HIV 感染ルートの知識は、異性間性行為、男性間性行為、注射器のまわし打ちについては、全回答者の90%の者が感染ルートとして知っており、母親から赤ちゃんへは80%の者が知っている。また、国内での輸血・献血を感染源としてあげる者は全回答者の半分以上を越える。わが国の HIV 感染者の多くは、血液製剤を使用した血友病患者だということを考える時、これは、間違った知識だと断定することは出来ないであろう。

4. HIV 感染のリスク行動である配偶者又は特定のパートナー以外の者と過去3年間に性行為をしたことがあると回答した者は全回答者の25%である。職業別でみると、専門学校生は多く、四大生・短大生は少ない。同じ20歳前後の若者で、学生であるが、大きな違いがみられる。この原因を今後研究する必要がある。男女別では、男性の方が多くリスク行動を取っている。リスク行動を取った者と取らなかった者の間にエイズ意識や予防教育に関して差はなかった。

その時、コンドームを使用したかどうかは、「いつも使用した」者は38%に過ぎない。残

りは、「コンドームを時々使用した」者31%、「全く使用しなかった」者30%である。後者2つはハイリスク群であるが、今回の全サンプルの15%である。年齢別にみると、「いつも使用した」は若い人に多く、年輩者は「使用しなかった」が多い。学校別では、四大生は「いつも使用した」者が多いが、専門学校生の使用率が低い。コンドームをいつも使用した者と、使用しなかった者との間にはエイズ意識や予防教育について差はみられなかった。

海外での HIV 感染のリスク行動はすべてパートナー以外との異性間行為であり、海外旅行者の8%が行っている。

最近自分の性行動に変化があったと報告した者は、全体の10%である。その変化は、「特定のパートナーとする」「コンドームを使用する」「不特定の相手とのセックスをやめた」等である。変化があったと報告している者は、ないと報告している者よりも、エイズに対し、不安が高く、エイズ被害を意識している。

本研究から導かれる今後の方向は、研究及び教育の点で、次の4つが考えられる。

- ①リスク行動における、20歳前後の若者の大きな違いの原因を究明すること。
- ②正しい知識の普及を効果的に行うとともに、関心を高め、行動変容を促すエイズ教育の方法等について調査・研究を実施していくこと。
- ③18歳以下の若者に対し、エイズ予防教育を推進すること。
- ④社会人に対し、エイズ予防教育を推進すること。

(平成6年9月12日受理)

文 献

- Brooks-Gunn, J., Boyer, C.B., & Hein K. 1988 Preventing HIV infection and AIDS in children and adolescents. *American Psychologist*, 43, 958-964.
- エイズサーベイランス委員会 1994 HIV 感染者情報 (1994年1月27日発表資料)
- エイズサーベイランス委員会 1994 HIV 感染者情報 (1994年7月26日発表資料)
- 広瀬弘忠 1990 酸性化する地球 NHK ブックス
- Kelly, J.A., Murphy, D.A., Silkkema, K.J., & Kalichman, S.C. 1993 Psychological interventions to prevent HIV infection are urgently needed. *American Psychologist*, 48, 1023-1034.
- 宮本巖 植田美津江 通木俊逸編 1993 苦悩するアメリカのエイズリポート エフエー出版
- 宗像恒次編 1992 エイズ・サバイバル 日本評論社
- Takahashi, T. & Ito, M. 1994 AIDS awareness and attitudes among Japanese adults and adolescents. *Tenth International Conference on AIDS Abstract Book*, 2, 356.

附記：参考のために、本報告に関する調査票を掲載する。

アンケート調査票

- 1 あなたはエイズにどの程度関心がありますか。
(1)全く無関心である (2)かなり無関心である (3)やや無関心である
(4)少し関心がある (5)かなり関心がある (6)非常に関心がある
- 2 あなたはエイズについてどの程度不安を感じますか。
(1)全く不安を感じない (2)ほとんど不安を感じない (3)あまり不安を感じない
(4)少し不安を感じる (5)かなり不安を感じる (6)強く不安を感じる
- 3 エイズによって、あなたはどの程度被害を受けると思いますか。
(1)全く被害を受けない (2)ほとんど被害を受けない (3)あまり被害を受けない
(4)少し被害を受ける (5)かなり被害を受ける (6)とても被害を受ける
- 4 自分がエイズ被害を防止することは、どの程度可能であると思いますか。
(1)全く不可能である (2)ほとんど不可能である (3)やや不可能である
(4)少し可能である (5)かなり可能である (6)きわめて可能である
- 5 国や公共機関は、エイズに対して有効な対策を行うことがどの程度可能だと思いますか。
(1)全く不可能である (2)ほとんど不可能である (3)やや不可能である
(4)少し可能である (5)かなり可能である (6)きわめて可能である
- 6 個人レベルの努力で、エイズにかかる危険がどの程度避けられると思いますか。
(1)全く不可能である (2)ほとんど不可能である (3)やや不可能である
(4)少し可能である (5)かなり可能である (6)きわめて可能である
- 7 今までに、エイズの予防教育を受けたことがありますか。
(1)あ る (2)な い
- 8 エイズについてはどのような方法で、知識を得ましたか。
(いくつでも可)
(1)マスコミ (テレビ, ラジオ, 新聞など) (2)雑誌, 週刊誌など
(3)保健所等の行政機関 (4)診療所, 病院 (5)家族 (6)知人, 同僚
(7)学校, 教師 (8)ポスター, パンフレットなど (9)職場の人
(10)わからない (11)その他 ()
- 9 エイズに感染してから発病までの潜伏期間は、一般的にどのくらいと思いますか。
(1)2～8週間 (2)約3か月 (3)1年～10年 (4)わからない
- 10 エイズはどのようにして感染すると思いますか。(いくつでも可)
(1)食器を共用 (2)蚊・昆虫に刺されて (3)男性同性愛行為
(4)異性間性行為 (5)せき・くしゃみ・唾液 (6)理髪店・美容院
(7)プール・風呂 (8)国内での輸血・献血 (9)注射器の回し打ち
(10)トイレの便器 (11)電車などの吊り革 (12)握手
(13)本・文房具, タオル・クシなどの日用品 (14)母親から赤ちゃんへ

11 あなたは配偶者または特定のパートナー（複数も可）以外の人と、この3年間にセックスをしたことがありますか。

(1)あ る (2)な い

↓

12 その時、コンドームを使用しましたか。

(1)いつも使用した (2)時々使用した (3)全く使用しなかった

(4)覚えがない

↓

13 この時、コンドームを使用しなかった主な理由はなんですか。

(いくつでも可)

- (1)持参していなかった (2)面倒・煩わしい (3)相手に要求することが恥ずかしい
(4)相手の同意が得られない (5)楽しみが減る・不快である (6)妊娠の心配がなかった
(7)相手から要求されなかった (8)性病の心配がなかった (9)特別気にしなかった
(10)その他 ()

14 この10年間に、海外に旅行・出張などしましたか。

(1)観光 (回) (2)ビジネス (回) (3)留学
(4)その他 (回) (5)なし

15 海外に行かれた方におたずねします。主な渡航先はどこですか。

(1)北米 (2)南米 (3)ヨーロッパ (4)アフリカ (5)東南アジア
(6)オーストラリア (7)ニュージーランド (8)中国 (9)ハワイ
(10)グアム (11)その他 ()

16 同じく海外に行かれた方におたずねします。

渡航先で次のような行為をしましたか。(いくつでも可)

- (1)配偶者又は特定のパートナー以外の人とのセックス (2)輸血を伴う治療 (3)男性同性愛
(4)麻薬、覚醒剤の注射器による回し打ち (5)(1)~(4)のような行為はない

17 エイズ感染者が急増していますが、このことで実際に自分の性行動に最近変化がありましたか。

(1)あ る (2)な い

↓

18 「ある」と答えたかたにおたずねします。それはどのような変化ですか。

(いくつでも可)

- (1)特定のパートナーとする (2)コンドームを使用する (3)不特定の相手とのセックスをやめた
(4)不特定の相手の数を減らした (5)その他 ()

↓

19 「ない」と答えた方におたずねします。それはなぜですか。

(いくつでも可)

- (1)セックスをしないから (2)特定のパートナーとするから
(3)コンドームを常に使用しているから (4)うつるのは運が悪いと思うから
(5)気にしていない (6)知識がないから (7)その他 ()